

「求む新鮮力―道内大学アメフト部の新勸作戦」⑧室蘭工業大

コロナ禍に負けない

2020年、2021年と室蘭工業大アメリカンフットボール部は新型コロナウイルス禍に翻弄された。6年ぶりに1部に復帰した2020年は、大学の遠征禁止措置で道学生選手権を2試合とも棄権。戦わずしてシーズンを終えた。特例で1部に残留した21年も、大学のコロナ対策で活動期間が制限され、練習不足もあって1部最下位に。2部との入れ替え戦も東京農業大に敗れて無念の降格となった。捲土重来を期す2022年、1部復帰への最初の取り組みが新戦力の獲得だった。

先輩8人が抜けた今年のチームは、選手が4年生2人、3年生6人、2年生4人の計12人とスタッフ2人。2人の4年生は高等専門学校からの編入生でアメフト経験が2年目のため、新主将は3年生の北村朋也君が務める。新人勧誘の目標は選手10人。北村主将は「フルスクリメージでしっかり練習し、1部復帰を目指すため」と力を込めた。

勧誘作戦は去年の12月から準備を始めた。Xリーグ・オービックの元コーチが主宰する「QB道場」の新人勧誘講座を北村主将がりモート受講。「最初からアメフトを出さない」「部内の雰囲気作りが大事」などのコツを学んだ。迎えた4月の本番。勧誘ポスターの数を増やし、新生が通りそうな大学近くのカレーショップや食堂に張った。4月5日の入学式の後の最初の週末にビンゴ大会を開いた。「アメフトを押しつけず、人を呼びやすいイベントを」との狙いからで、22人の新生が集まった。

アメフトの雰囲気を知ってもらおうと10日には、タッチフット体験会も開いた。集まった1年生は2人だけだったが、部員たちに温かく迎えられ、初めて触れる楕円球に興味津々。見事にパスキャッチを決めると先輩たちにもみくちやにされた。札幌開成高でバスケットボール部だったという鎌倉佑太君(1年)は「コンタクトスポーツに興味がある。バスケットの経験も生かせそう」とアメフトに強い関心を示した。

その後も初の試みの履修相談会やゲーム大会、ボウリング大会などで勧誘に取り組んでいた20日すぎ、悪夢に見舞われた。複数の部員の新型ウイルス感染が分かり、大学から5月8日までの部活動の中止を指示された。勧誘長の渡辺陸君(3年)は「まだ1人も入部が決まっていない。これからが大事なのに」と悔しがったが、コロナ禍が収まるのを待つしかなかった。

5月2日、部員たちの自宅療養期間が無事終了し、9日からの活動再開も決まった。北村主将は「いろいろあったが、鎌倉君が入部してくれそうだ」と安どしながら、「中断前に声をかけた新生たちと作ったラインのグループもある。6、7人がアメフトに興味を持ってきているので、何としても仲間に入ってもらおう」と熱望する。そして「1部復帰には新戦力が欠かせない。これからも声かけを続ける」と決意した。



新入生たちも興味津々だったタッチフット体験会